

§はじめに

このルールは、「HexRace」の拡張ルールである。内容は完全にGM向けのもので、純粋にプレイヤーだけを楽しみたい人にはオススメできない。
以降の設定をどのように使用するかはGMの自由とする。一部だけを使ったり、変更してもかまわない。真実は無数にあり、どれもそうとは限らないから。

§「我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこへ行くのか」

真実である答えは1つしかない。しかし、“真実”であると認識されるもの”について、その限りではない。“其れ”は、正気と狂気の狭間に沈み込み、目を閉ざし、耳を塞ぎ、口を噤んだモノたちによって闇に葬られてきた。

“其れ”は、真実であり、同時に真実ではない。それは何故か？ その答えはこの世界が『偽装世界』であることに辿り着き、『真世界』と向き合う勇気を持つことができた者のみができる。

ほとんどのモノは、“其れ”を知ること无意識に拒否する。それは何故か？ それは皆がそのように作られているからだ。“其れ”を知る、もしくは触れることで正気を保てるものはほんの一握りである。正気を保ちたいのなら、目を閉ざし、耳を塞ぎ、口を噤んでおくべきである。

もし君に、自我の崩壊を食い止め、絶望的なこの世界に、あえて立ち続ける勇気があるのなら、さあ、この先を読みたまえ。

～目の前で砂と化した古い写本の序文より～

○種の起源

具象界に存在する人類は、力を失って放逐された魔神の子孫である。魔界で大半を占める人型の魔神は、その力を全て失うと人間そっくりの姿になる。角や翼を持つ魔神は、その力が失われると、その象徴である角や翼が消滅する。“人型の魔神”といわれるが、実際にはそれらが力を失った姿が人類である。つまり、力を失った魔神＝人類なのだ。同じことが動物にも言える。動物型の魔神は、力を失うと具象界の動物と同じ姿となる。体格も縮小し、知能も低下する。これは植物型の魔神も同じことである。

ゆえに、具象界に存在する人類、動物、植物（の始祖となる存在）は、全て魔界が起源である。そして先の問いには以下の回答が与えられる。

問い) 我々はどこから来たのか？

答え) 魔界からである。

問い) 我々は何者か？

答え) 力を失った魔神である。

問い) 我々はどこへ行くのか？

答え) 君たちは具象界という隔離された次元世界に放り出された存在である。後は好きにするといいい。

人類は魔界からやってきた。進化論とは異なり、最初から現代人類と近い姿をしていた。類人猿とのミッシングリンクが発見できないのはそれが理由である。これには動物と植物も当てはまる。

○具象界の創造

具象界は、創造神級の力を持つ3体の魔神が、協力して作った世界である。それぞれの思惑は違いが、具象界（＝力を失った魔神を隔離する世界）を作成するという点では意見が一致していた。

この3体は、具象界では三位一体、三神一体、三相女神といった3柱がセットで扱われる神話として（歪んで）伝わっている。これは魔界の魔神が様々な変遷や歪みを得た上で具象界に神話として伝わっている現象と一致する。

この3体の魔神の正確な姿や能力は伝わっていない。ただ、具象界の神話に照らし合わせると、三相女神に相当する「少女」、「母親」、「老婆」というイメージが一番近いといわれている。語り部の魔神が伝える具象界の創造神話とは以下のようなものである。なお、正確な姿や名前については情報が失われているため、便宜上、その3体を『少女』、『母親』、『老婆』と称する。

～～～

3人は力を失いしらのために、協力して新天地を作ること承諾した。混沌の中から必要なものを3人で粉ね合わせ、新たな世界を作った。

だが、その世界は真っ暗だった。

「私が世界を照らす光となりましょう」と『少女』は言った。彼女はその世界に降り立ち、燦然と輝く太陽となった。

だが、その世界には力を失いしらが生きる場所が無かった。

「私が子らを抱擁する大地となりましょう」と『母親』は言った。彼女はその世界に降り立ち、肥沃な大地となった。

だが、その大地に降り立った力を失いしらは、急激に増え、世界を壊し始めた。

「私が死を与え、子らの世界が続くように管理しましょう」と『老婆』は言った。彼女は自らを核として冥界を作り、化身たる死神達をその世界にばら撒いた。

～～～

○地球と太陽と冥界

地球は実は具象界の中心に位置する。具象界を構成する六次元的特異点である。これは具象界において天動説の根拠となったものである。ただし、地球の住人から見ると、現代科学で解明されているような天体現象として観測される。これは、具象界が『偽装世界』と言われることに由来する。

太陽は地球を維持するためのエネルギーの塊である。前述の地球の説明に反して、太陽の存在は完全に物理的・科学的に地球（＝大地）の存在に必要不可欠である。これは、太陽（＝熱）の無い世界に“力を失った子ら”が耐えられないからである。

冥界は具象界に“力を失った子ら”を閉じ込めておくために作られたものである。“力を失った子ら”は魔神としての力と霊格を失った代わりに、旺盛な好奇心と生殖能力を獲得してしまった。これによって発生する人口爆発に、大地はすぐに限界に達した。そのため、一定以上増えず、かつ無用の知識を直接継承しないように“死”の性質が付与された。つまり、数を管理し、具象界に留めておくシステムである。これには、死して魔界に転生しないようにという思惑もあった。

具象界の生き物は、寿命が尽きるから死ぬのではなく、死神が迎えにくるから死ぬのである（ただし、当の死神にとっては逆の認識になっている）。

§シナリオフック

1）先祖返り

- ・街中で突然、普通の人間が魔神になる現象が発生する。
- ・魔神化した人間の大半は暴走し、周囲に破壊と殺戮をもたらした後、自らの魔力の高さを制御できずに自爆する。
- ・実際にはその現象は先祖返りなのだが、その真相は誰にも分らない。
- ・数件発生し、P Cの目の前でも起きる。

- ・複数件の現象を調査・比較すると、魔神化現象は一定の法則が見えてくる。

2）月へ帰る時がやってきました

- ・何の変哲もない人生を送っていたはずなのに、突然、魔神の一団が現れ、「お迎えに上がりました」といわれる。
- ・自分はこっそりと具象界に隠されていた強力な魔神の一体で、覇王戦争の局面を切り開く切り札だと言われる（これは真実か嘘かはわからない）。
- ・実はある魔王の転生体であることが判明し、その潜在能力の高さが争奪戦の対象になってしまった。

3）狙われた村

- ・人口が減少し続けている小さな村で、一夜にして住人全員が失踪するという事件が発生する。
- ・その村には、数日後、何事もなかったかのように住人の姿があった。
- ・そんな村から逃げ出してきたという人物に出会い、住人がまるごと別人にすり替わっていると言われる。